



テレマカシー

vol. 7
2006.1.15 発行

テレマカシーとは? ▶ Terima kasih = インドネシア語で感謝を表す言葉。在宅で看取らせていただいたある方は海外旅行が大好きでした。その方が最期にご家族に残された素敵な言葉を使わせていただきました。

謹賀新年

この犬は「ラク」と言います。ラクは、認知症のお年寄りが暮らすグループホーム寿楽(じゅらく)の看板犬です。4年前、何か動物がいたら・・・と宇都宮動物園に問い合わせたところ、やってきた子犬がラクでした。

あるとき、重い病気になってしまい、獣医さんから「安楽死」をすすめられたことがあります。それではかわいそうだからと、寿楽の皆さんが懸命に看病して元気になりました。

ラクはおとなしい犬です。犬の苦手な私がそっと手を出すと、たまには、お手をしてくれます。ラクは、足が悪いので走れません。番犬らしくあ



まり吠えることもありません。でも、皆さんから大事にされて、静かに生きています。ここには、ラクの居場所があるのです。

人にも動物にも、安心して食べて暮らせる「居場所」が必要です。大切にされると、自分の役割がみつかります。

今年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

ひばりクリニック 高橋 昭彦



いつものやり方が安心

外来に来た4歳のアキラ君(仮名)は、いつものように診察室のいすによじ登る。そこはお気に入りの場所。アキラ君がいすの下にあるレバーを上げるとスルスルと座面があがる。こうして私の目線と同じくらいの高さで診察を受けるのだ。

まず心臓や肺の音を聴く。アキラ君はじっとしている。私が聴診器をあててしばらくすると「キャシャーン」とつぶやく。合図だ。私は、ヒーローの主題歌の始めにでてくる言葉を彼の耳元で語りはじめる。

「たった一つの命を捨てて、生まれ変わった不死身の体・・・」

アキラ君は、キャシャーンの再放送をお父さんと一緒に楽しんだらしい。どういうわけか診察の際にキャシャーンの話がでて以来、主題歌の語りをする、アキラ君はじっと聴いてくれる。聴診はおわった。今日は予防接種が目的なので、ワクチンの注射をする。痛かったかな? なんとか無事に終わった。立ち上がって「ありがとうございました」とお別れをしようとするが、機嫌が悪い。お母さんが抱っこして診察室を出て行こうとする

と、真っ赤な顔をして、「眠い眠い」と言ってベッドをさす。そうか、いつもは聴診のあとにベッドに横になってお腹をみていたのだ。アキラ君は、いつもと違うことをすると機嫌が悪くなる。早速ベッドに横になってもらい、お腹をみる。次はそうそう、いつもは口の中もみる。アキラ君もいすによじ登って「のど、のど」と催促する。のどをみると、今度は「みみ」という。時々ではあるが耳もみるからだ。「耳も大丈夫です。はい、これでおしまいです。」アキラ君はニコニコ顔で帰っていった。

アキラ君は、いつもと違ったやり方になると、機嫌が悪くなったり、パニックを起こしたりする。今日は普段と違ってお腹や口の中をみなかった。だからアキラ君は機嫌が悪かったのだ。いつもの診察の流れをしっかりと覚えているのである。これからは、予防接種の時もアキラ君にはひと通りの診察をするほうがいい。いつものやり方が安心なのだから。

アキラ君には「自閉症」という発達障害がある。



ドメスティック・バイオレンス(DV)

家庭内暴力を受ける母と子ども



はじめに

家庭の中で行われている暴力のなかで最も深刻なものに、配偶者から暴力を受ける「ドメスティック・バイオレンス(DV)」があります。これはかなり多いものですが、表面に出てこないことがほとんどです。

DVとの出会い

ある日、女性が診察に訪れました。胃が重い、食欲がないという訴えでした。話を聴いているうちに、夫からの執拗な暴力を受けていることがわかりました。いうことを聞かないと脅す、物で殴ることを繰り返すのです。警察は、「夫婦げんか」だから、と取り合ってくれません。たび重なる暴力に危険を感じた女性は、身を隠しました。夫に見つかるとうるさなかかわりません。追われているので、外で車の音がすると心配になります。女性は怯えています。しばらく話を伺い必要な薬を出し、相談機関にも連絡しました。相談した機関からは「住むところが夫に分らないよう、外部からの問い合わせには応じないように」と助言をいただきました。逃げたときがもっとも危険なのです。その女性は、保険証の住所と実際に住んでいるところが違いました。これが私とDVとの初めての出会いでした。



3日に1人は夫に殺されています。

内閣府の調査(*)によると、配偶者や恋人から「殴る、蹴る、物を投げつける」など、身体に暴行を受けた女性は、およそ6人に1人。その行為によって「命の危険を感じた」のは女性回答者全体の4.4%、およそ20人に1人でした。6人に1人、20人に1人というのは、驚くべき数です。しかし、誰にもいえないために知られていないことが多いのです。また、平成15年には133人の女性が夫によって殺されています。わが国では3日に1人の女性が夫が

ら殺されているのです。加害者となる男性は、職種、学歴などに関係なく存在します。彼らは自分をコントロールすることができずに暴力を振るうのではありません。彼らは、妻を強制的に服従させるために暴力を選ぶのです。

暴力による支配

DVの加害者と被害者の間には対等な関係はありません。DVの本質は、力と支配です。加害者は、殴る、蹴るなどの暴力はもちろん、怒鳴ったり脅したり、被害者や子どもにまで性行為を強要することもあります。さらに、お金を渡さない、家から外に出さないなど、経済的、社会的にも被害者を拘束していきます(表1)。

精神的な影響もはかり知れません。いつ暴力の爆発が起こるかと思うと、常に恐怖と不安があります。手紙は開けられ、電話もかけられず、情報は遮断されます。何度逃げても、殺されるかも知れないという恐怖を感じてまた戻ってしまう被害者もいるのです。被害者は自由がなくなり、孤独と無力さを感じます。

激しい暴力のあと、しばらく暴力のない時期が続くことがあります。すると、これはおかしなことなのですが、被害者は暴力がないことを“感謝”するようになります。なんとかして加害者の機嫌をそこねないようにと顔をうかがいつつ生活をするのです。しかし暴力は繰り返され、次第にエスカレートしていきます。

逃げることは、ドメスティック・バイオレンスについて理解のない社会では容易なことではありません。逃げても居場所をつきとめられ、暴力を振るわれます。実家や知人宅から「もう来ないでくれ」といわれると、逃げるところがなくなります。「あのご主人が暴力なんて・・・」、「夫に従うのは当然のこと」、「あなたさえ我慢すれば、うまくいくのに」、などの理解ない言葉によって被害者は孤立していきます。こうして暴力による支配(パワーとコントロール)が続きます。

表1. 力と支配

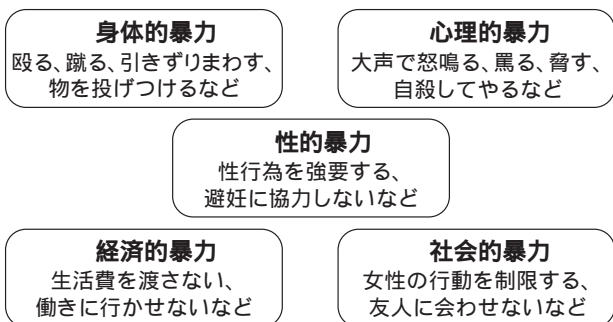


表2. ドメスティック・バイオレンスの被害にあったら？

都道府県が設置する「配偶者暴力相談支援センター」へ。
実際には「婦人相談所」とか「女性センター」という名称が多いです。DV防止法にもとづき、相談、一時保護、シェルター(保護施設)の利用、情報の提供・援助、などが行われます。民間の支援団体も各地にあります。

明日への希望

勇気を持って遠くへ逃げる母と子がいます。相談機関を頼り、シェルター(保護施設)に逃げることによって、とりあえずの安全は確保されますが、住む家を失い、母は経済の糧を失い、子どもは学校や友達を失うのです。やがて住む場所が決まっても、いろいろな問題が待っています。母親はなかなか仕事が見つかりません。夫に見つからないように仮名で暮らしている母子がいますが、仮の名前で就職が非常に難しいのです。面接の際に、住民票はとれるのかと聞かれると、できませんとしか言えません。夫に知られずに住民票を移すことは容易なことではないのです。

一方、身の安全を確保しつつ実名で暮らす人もいます。事情があって住民票を動かすことができなくても、その住民として生活できることはとても大事です。被害者を支援するある人はいいいます。「住民票がなくても、アパートの賃貸契約書や公共料金の領収書があれば住民として認めてもらえる。民生委員に役所に同行してもらい、この地域に住んでいる、と言ってもらうのもいい。」学校の転校も、依頼すれば教育委員会同士でやってもらえます。前の学校は夫の住む地域にあります。そこに手続きをしにいこうという、危険を回避できるのです。仕事ができる。健康保険に入れる。学校へ行ける。これはとても大切なことです。母と子の回復には時間がかかりますが、居場所があり、食べていけることは明日への希望につながります。

悲しい連鎖

DVは、子どもにも深刻な影響を与えます。本来、子どもは親に保護され、育つものです。しかし、父親から暴力を受ける子どもには、自分は大事な存在であるという感情が十分育ちません。暴力を受けなくとも、目の前で父が母に暴力を振るう光景を見続けることで、子どもは誰も何もできない無力感を感じます。暴力が日常化することによって、子どもは、暴力でものごとを解決することを学習していきます。

こうした家庭で育つ子どもは、自分を大切だと思えない、

大人を信じることができないといえます。不眠や不安も訴えます。自分の感情を人に伝えることが上手ではありません。もやもやしたものを表現するために、自分を傷つけたり、他人に暴力をふるうこともあります。さらに、自分が親になったとき、暴力で配偶者や子どもを支配することすらあるのです。悲しい連鎖です。

機会の平等

人生の途中から、一からスタートしなければならない母と子がいます。いまだ、スタートできない人もいます。どうして、被害者の母と子がこんなに苦勞をしなければならないのでしょうか。誰にもいえず、理解してもらえず、やり直しをするのにも多大な努力がいるのです。どうして加害者の男性だけが同じ地域で平気な顔をして暮らしていけるのでしょうか。

「不平等社会日本」の著者である佐藤俊樹さんは、結果の不平等と機会の不平等は分けて考える必要があるといえます。結果の不平等とは、努力や能力の結果もたらされるものだから、努力した人は報われる、ということにつながります。一方、機会の不平等は、親の収入や家庭の環境など、本人の力ではどうにもできないものをいいます。今の日本は、機会の平等が保証されないまま、どんどん競争社会になっています。にもかかわらず結果の不平等は当然とされているのです。平等には、結果の平等と機会の平等の2つありますが、「機会の平等」は、私たちにとって最大限に尊重すべきものなのです。

DVの根底にあるのは、不平等な関係です。相手の要求に対してノーと言える関係が平等な関係です。DVや子どもの虐待について知るようになり、今まで見えなかったものが見えてきました。被害者の母と子どもには、いっそうの理解と支援が必要です。第一歩は、まず「知ること」からはじまると思っています。

* 内閣府「配偶者等からの暴力に関する調査」2002年
<http://www.gender.go.jp/e-vaw/index.htm>

人工呼吸器をつけた 尊(たける)君のところにサンタが登場!

年末のある日、訪問入浴がおわり、湯上りでほかほかの尊君のところに、サンタさんがやってきました。訪問看護ステーション星が丘の皆さんがサンタに変身して登場したのです。わくわく、どきどき、のサプライズでした。尊君はプレゼントをもらいご機嫌。星が丘の皆さんありがとうございました。



パキスタン北部地震・募金へのご支援ありがとうございました。

♥ パキスタン北部地震被害については、多数の方からあたたかいご支援をいただきました。ご支援いただいた募金は皆様のお気持ちとともにAMDA(アジア医師連絡協議会 <http://www.amda.or.jp/>)へ28,095円、ユニセフへ28,000円、総額56,095円をお渡しいたしました。厳寒の現地では今も復旧活動や被災した子どもたちへのケアなどが続いています。ご協力ありがとうございました。

わっどわ〜く

第10回 在宅ケア・ネットワーク栃木 開催のお知らせ

日時：平成18年2月11日(祝)10:00~15:30
会場：自治医科大学・地域医療情報研修センター大講堂
内容：シンポジウム、講演、実践報告

シンポジウム
地域力を問う「医療福祉を核にした街創り」

講演
在宅ケア10年を振り返って
「出前医者15年の挑戦」

おやま城北クリニック 太田秀樹さん
実践報告

こどもの在宅ケア実践報告

詳細はマロニエ医療福祉専門学校 榎林(くればやし)様まで
電話 0282-28-0030 FAX.0282-28-1139

テレマカシーのサポーターのご紹介

第6号から金子敏子さんが宛名書きなどの発送ボランティアをして下さっています。金子さんありがとうございます。

また、そっと切手をお送りいただきました皆さん、ありがとうございます。



「ひばりクリニック」のご案内

診療時間

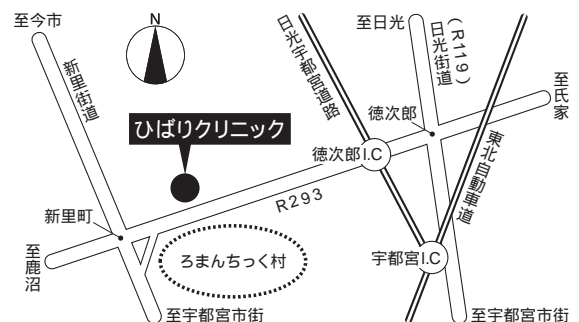
時間	日	月	火	水	木	金	土
9:00~12:00	(休)			(休)		訪問診療	
午後 (在宅医療)	(診)	訪問	訪問	(診)	訪問		訪問

ひばりクリニックの運営理念

- 1)在宅で過ごされるご利用者に出前の医療を提供すること
- 2)子どもからお年寄りまで診る家庭医の機能を提供すること
- 3)障害児・者やお年寄りの生活を支える市民活動を支援すること

この通信は、子どもから大人まで、障害のある人もない人もどんな人も社会から排除されることなく、地域で一緒に生きていける世の中を目指して、ひばりクリニックが企画・編集しております。この通信についてのご意見・ご感想はひばりクリニックまでお寄せください。

栃木県宇都宮市の西北部、新里町(にっさとまち)にある、ログハウス風の小さな診療所です。



〒321-2118 栃木県宇都宮市新里町丙357-14

TEL 028-665-8890 FAX 028-665-8899

E-mail hibari-clinic-01@theia.ocn.ne.jp